1

練成問題

(1) (例) 庭で木を育てる。

(2) (例) 朝食には、コーヒーを飲み、パンを食べた。

(3) (例) 午後一時になったら、呼びに来てください。

(4) (例) 迷子の少女はただ泣くだけで、自分の名前も言えなかった。

(別例) 迷子の少女はただ泣くばかりで、自分の名前も言えなかった。

(5) (例) 見返りがなくても、他人には親切にしなさい。

(別例) 見返りがないけれども、他人には親切にしなさい。

(6) (例) 私は、人間は誰(だれ)でも知的好奇心を持っていると思う。

(別例) 人間は誰でも知的好奇心を持っている。

(7) (例) 彼女が流ちょうに英語を話せるのは、三年間イギリスに留学したからだ。

(別例) 彼女は三年間イギリスに留学したので、流ちょうに英語を話せる。

(8) (例) 私は都会の人々を見て、歩くスピードが速いと思った。

(別例) 私が都会の人々を見て思ったのは、歩くスピードが速いということだ。

解説

(1) 格助詞「に」は、「育てる」という動詞とは結びつきません。「に」を「で」に変えます。もし「に」を用いるなら、「庭に木を植える。」などとします。

(2) 「コーヒーとパンを食べた」の部分の並立の関係が整っていません。「コーヒー」は、パンのように食べるものではないので、そのあとに「飲む」などの動詞を補う必要があります。いくつかの文節が並立の関係にある場合、それらが対等の資格で並んでいるかどうかをよく確かめましょう。

(3) まだ「午後一時」にはなっていないのに、「なると」と確定条件を表す文節があとに続いていることが不適切になっています。「なると」を、仮定条件を表すように書き直しましょう。仮定条件は、まだ条件となる事柄が起こっていない場合を、確定条件は、条件となる事柄がすでに起こっている場合を表します。

(4) 「ただ」という副詞は、「だけ」「ばかり」などの限定を表すことばを、必ずあとに伴って用いられます。

(5) 「のに」は逆接の確定条件を表します。「見返り」があるかどうかはまだ分からないので、逆接の仮定条件を表す「ても」などを用いて書き直します。「たとえ見返りがなくても、他人には親切にしなさい」とことばを補うと、文意がよくわかります。また、逆接の確定条件を表す文として、「見返りがないけれども」と直すこともできます。

(6) 「私は」という主語に対する述語を作ります。「私は、人間は誰でも知的好奇心を持っていると思う」などとすることで、「私は―思う」「人間は―持っている」という二組の主語・述語（部）の関係が含まれている複文になります。また、「私は」という文節を取ってしまい、「人間は誰でも知的好奇心を持っている」という単文に書き直すこともできます。

(7) 「話せるのは」という主語に対する述語を作ります。「三年間イギリスに留学した」の部分を、「彼女が流ちょうに英語を話せる」ことの理由を表すように直しましょう。また、語順を変えて、「彼女は三年間イギリスに留学したので、流ちょうに英語を話せる」などと直すこともできます。この場合、「留学したので」と

いう文節で、理由を表しています。

(8)「私が都会の人々を見て思ったのは、歩くスピードが速いと思った」は、一文の中に「思った」ということばが重複しているので、どちらかを取ります。前の「思った(のは)」を取る場合は、文末の「思った」という述語に対応する主語を作ります。誰が「思った」のかが明らかになるように直しましょう。また、文末の「思った」を取る場合には、「思ったのは」という主語に対応する述語を作ります。「歩くスピードが速い」の部分を、私が思ったことの内容を表すように直しましょう。

2

(1) (例) 後世に名を残すような人物になりたい。

(2) (例) 長年の習慣が脳と手先を連動させており、鉛筆を持たないと思考が始まらない。

(3) (例) ハチが針で敵を刺した。

(4) (例) 子供達は、暗やみを怖がった。

(別例) 暗やみを、子供達は怖がった。

(5) (例) 僕のなくした財布が、昨日見つかった。

(別例) 昨日、僕のなくした財布が見つかった。

(6) (例) なぜか欠席した彼の話題で、パーティーは盛り上がった。

(別例) パーティーは、なぜか欠席した彼の話題で、盛り上がった。

(7) (例) 製薬会社の社長が世界に公表したのは、新薬の成分分析表だ。

(8) (例) 旅人に、村人は道を教えてやった。

(別例) 旅人に、村人は道を教えてあげた。

(9) (例) 教授に、僕は特別講義をしていただいた。

(10) (例) 道がぬかるんでいて、全速力で走れない。

(11) (例) フランス旅行で最も印象に残ったのは、美術館が素晴らしいことだ。

(別例) フランス旅行で最も印象に残ったのは、美術館の素晴らしさだ。

(12) (例) 地球の温暖化が進んだ原因に、オゾン層が破壊されたことが挙げられる。

(別例) 地球の温暖化が進んだ原因に、オゾン層が破壊されたことがある。

解説

(1)「後世に名が残るような人物になりたい」の「名が―残る」は、主語・述語の関係です。一方、「後世に名を残すような人物になりたい」の「名を―残す」は、修飾・被修飾の関係です。また、「残る」は自動詞、「残す」は他動詞であることも押さえておきましょう。自動詞は「～が」、他動詞は「～を」という形がその直前にきます。

(2)「長年の習慣が」という主語に対応する述語を作ります。「長年の習慣で脳と手先が連動しており、鉛筆を持たないと思考が始まらない」では「脳と手先が―連動しており」が、また、「長年の習慣が脳と手先を連動させており、鉛筆を持たないと思考が始まらない」では「長年の習慣が―連動させており」が、部分の主語・述語の関係であることも確かめておきましょう。

(3)「針で」何(誰)を刺したのかが明らかになるようにします。「針で」と「敵を」は、「刺した」の修飾語になります。

(4)「子供達は」に対応する述語を作ります。「暗やみは」も、それにあわせて変えましょう。

(5)「財布が見つかった」のは「昨日」であることを明らかにするた

めには、この二つの文節が、修飾・被修飾の関係であることをはっきりさせなければなりません。「昨日」を「財布が見つかった」の直前に移動するか、適切な場所に読点を打つかします。一文の中で、修飾語とその被修飾語の位置が離れすぎてしまうと、係り受けをとらえにくくなることがあるので、注意しましょう。

(6)「パーティーは、なぜか欠席した彼の話題で盛り上がった」では、「なぜか」が、「欠席した」にかかるのか、「盛り上がった」にかかるのかはっきりしません。語順を変えるか、適切な場所に読点を打つかして、「なぜか―欠席した」が修飾・被修飾の関係であることを示します。また、「なぜか」が「盛り上がった」にかかるようにするには、「パーティーは、欠席した彼の話題でなぜか盛り上がった」「パーティーはなぜか、欠席した彼の話題で盛り上がった」と直します。

(7)「新薬の成分分析表(だ)」という述語に対応する主語を作ります。何(どんなもの)が「新薬の成分分析表」なのかを考え、「世界に公表したのは」という主部を作ります。そして、誰が、「世界に公表した(のは)」のかが明らかになるように、「製薬会社の社長が」を部分の主部とします。

(8)「旅人は」を「旅人に」に変えたことで、「村人に」が「村人は」という主語に変わります。そして、「もらった」の部分も「村人は」という主語に合わせて変えます。「もらう」は動作を他から受ける意味を表す動詞なので、「やる」という、動作を他に対して行う意味を表す動詞に変えます。なお、ここでは、「やる」の謙譲語「あげる」を用いることもできます。

(9)「教授が、僕に特別講義をしてくださった」を敬語を用いないで表すと、「教授が、僕に特別講義をしてやった」になります。「教授が」を「教授に」に変えることによって、主語が「教授が」から「僕は」に変わるので、「や(る)」を「もら(う)」に変えます。そしてさらに、「もら(う)」の謙譲語である「いただ(く)」に直します。

(10)「走れる」などのように、一語で、「〜することができる」という意味を持つ動詞を、可能動詞といいます。可能動詞は、五段活用の動詞が下一段活用に変化したもので、命令形がありません。また、一語の可能動詞(例「取れる」)と、助動詞「れる・られる」が接続した動詞(例「取られる」)との区別ができるようにしておきましょう。

(11)「フランス旅行で最も印象に残ったのは」という主部に対応する述語を作ります。「印象に残ったのは」の「の」は、体言代用を示しています。「印象に残ったことは」と置き換えてみると文意がとらえやすくなるでしょう。

(12)「原因に」という修飾語に対応する被修飾語を作ります。一文の中で、「原因に」と「破壊されたからだ」と、似た意味のことばが重複しているので、文末の「から」をまず取り除きましょう。